

北満の記録(七)收容所その三

鳥目(夜盲症)

レンガ加工場に従事していて、生産能率が上がり、ソ側(当時のソビエト連邦)が驚くほどの生産高だったが、同じところで同じ機械窯を使っている生産が、ソ側には出来なかつたことを、やってきただけが、別に特別のことをしたわけでもなく、仕事をし易く自分たちで考えてやっただけ。そのことが能率向上につながっただけ。如何にソ側の労働者、職人の技術が低かつたかが分かる。

仕事は多種にわたり、主力はレンガ加工場、木材の製材所、旧工場の残務片付け整備、廃品の整理など、周辺の復興作業に使われた。付近は色々な工場地帯で、特別な工場はない。

この工場へ来て一か月程経って異変が起きた。夕方、薄暗くなつてくると目が見えなくなつて来るのだ。

鳥目(病名夜盲症)になるものが始め、重軽症者合わせて半数近くの者が患つていた。

日中は健康な者と同じ視力で、普通に仕事は出来るが、暗くなると全く見えなくなるのだ。軽重によつて視野に差があるが、灯りでも明るいというより、白い霧(もや)のような感じである。

山中での生活で食料の栄養不足から来るものだった。重症の順に(一)、(二)、(三)の番号札が付けられる。朝はみんなと一緒に作業に出て平常の仕事をし、(一)、(二)の者だけ他の者より一、二時間早く帰宿して、薬(肝油)を飲んで明るい内に夕食を済ませる。

夕食を済ませると、身の回りの整理をし、手探りで何でもできるようにして暗くなるのを待つ。季節は丁度日中の日が長いときで、午後八時頃まで明るく、朝は三時頃には明るくなる。

本当の夜盲は七、八時頃までであるが、部屋には窓も少なく、五時を過ぎるともう見えなくなってしまうのだ。

部屋の中には要所に目印の灯りが点され、外は入り口から便所までロープが張つてあり、それを伝つて行く。元気な者が交代で不寝番に付いて(一)、(二)の者の夜のトイレの誘導をする。(三)の者は目印の灯り、ロープを伝つて何とか用事を済ますことが出来る。

夕方からは飲みたい水分を控え、夜中に小用に行かないように努力する。たまに不寝番が他の者を誘導中に起きると、一人で歩くのだが、手探りでは思うように進まず、あつちこつちにあつちこつちばかり。明るい内に寝台を下りて、何歩進んで左右へ何歩と歩数を記憶しておくのだが昼間の仕事の疲れでぐっすり。夜中に小用でむっくり起き、寝惚け半分夜盲では、まともに歩けない。

夜は寝ているものと思ひながら、目をつぶつて友と話す寂しさ、夕方になる度に夕闇が恐ろしかった。しかしこの苦労も一か月程で、全員がほとんど治る。

シベリアといっても、六、七月はやはり夏で、日中はかなり温度も上がり、暑くなるので上半身裸で仕事をすることもある。昼休みに肌着を洗濯し、干して夕方着て帰るのだ。生乾きのものを着て帰ることもしばしばある。

一度製材工場へ二、三日仕事の応援にいった。日本の木工場と全く変わらぬ設備だ。工程は同じだが、ただ原木の製材方法が違ふだけ。丸太の原木を帯鋸で二インチの厚さに引き割るだけである。側の皮は付い

たまま、何処でどのような使い方をするのか、不思議であった。聞くところによると、このままの状態で使用すること。

この引き割った板はすぐ何処かへ運ばれていく。レンガ工場では完成されたレンガをソ連兵の運転するトラックが来て、何処かへ運んでいく。

九月に入り、すっかり秋の気配を感じる頃移動の発表がある。山の収容所にいたとき、各人の職業を書いて提出したことが思い出される。

その書類によりソ側で選抜し発表がなされた。

職業別

主に建設、土木、機械加工修理、溶接工、他、自分は「仕上工、溶接工」と提出してあった。

当収容所から十人が選抜される。発表され指名された者は翌日すぐ出発だ。移動先は、ハバロフスク中央収容所である。ハバロフスク近郊の収容所からも、選抜された我々の仲間が次々に移動してくる。

街はアムール川に沿った街だけに、大きい沢と丘の中に出来ている。変わった都市である。収容所は街のほぼ中央に位置した所で、すぐ近くに軍の兵舎があり、西側百メートル近くに航空隊司令部の大きな建物がある所であった。鉄鎖が回され、あまり広くもない中に大きい倉庫のよくな建物があるだけで、ここが今度の収容所だ。

中は高く広い中段の台に作られている。手職のある者（技術者）百五十名、無職者二百名の班に編成される。ハバロフスク日本人労働大隊として発足した。ここへ来て、新しい班が編成され、初めて我々の任務が発表された。

ハバロフスク日本人労働大隊発足

一九四六年十二月（昭和二十一年）。新しい収容所所長（大尉）の挨拶の概要。

諸君を多くの日本軍捕虜の中から選ばれた技術者として迎え、我々は諸君を同志として迎えます。今後我が国の戦後復興のために協力して欲しい。

以上のような内容の話であった。

我々も帰国の希望は捨てず、ここで日本の技術者として選ばれた以上日本人の誇りと意気を示してやろうと全員が一致した。（これが三年の長い労働生活の始まりである）

ここに着いて知ったことだが、すぐ裏に日本新聞社があることだ。いつどんなとき作られたのか、分からないが、日本の捕虜五十八万人に対する党の情報機関なのだ。早速日新より代表が来て我々の歓迎挨拶を行なった。

「日本の労働者として技術を遺憾なく發揮して、きたる帰国の日まで頑張ってください」

とすっかり共産党闘志の語りであった。また、この日党の政治局員（日本語が話せる）の話もあり、ここで我々の洗脳が始まる。

作業開始

秋も深まり朝夕の寒さも厳しくなり凍結も始まった頃、初めはほとんど土工作业で大変であった。三十〜五十センチの凍土上部はツルハシでもなかなか歯が立たず、手は寒さと振動で腫上がる始末。道路の片側

に幅一米深さが二〜三米の長い溝を掘るのだ。人海戦術なので、結構仕事は進む。掘り上がると配管である。どうやら配水管敷設であった。凍結もひどくなってきたので一部を残し他の仕事へ移る。

大建築基礎工事始まる

次は街の一角で、黒竜江（アムール川）を一望できる丘の上で測量（日本人）が始まり十五度位の傾斜地で基礎の土工から始められた。後にこの大建築物を完成し、日本へ帰国するまで、一九四六年十月〜一九四八年十一月まで毎日二百人位の労働力を投入して、我々同志の汗と労苦の二年間にわたる貴重な建築物である。今五十八万人の同胞は別として、我々が歩んだ苦闘の三年二か月の間にやって来た作業は、初めからソ側の綿密に計画された、一から十までの無駄のない順序であった。

一、日本への輸送（帰国）のための持ち物の指示。

衣類（冬服、防寒具一式、新品）

食糧（最低量指定、持てるだけ持たせる）。ある期間支給しないで済む。

二、暫く使用していなかった旧線路に入り輸送期日を遅らせる。

冬期に入り輸送が出来ないことの口実。

収容する場所は前もって計画された通り。

三、旧監獄（政治犯が入り酷使された所）

これから寒くなるから小屋の補修、薪の用意、越冬準備。

四、伐採作業

遊んでいては体に悪いといって働かす。

一定の幅の間の木を伐り、地均し、谷沢に橋を造る。

既に測量されていた途中分岐地点にレール、枕木、その他が集積してあった。

五、本格的な伐採、輸送のための積み込み。

六、廃工場の補修整備

レンガ工場他

七、レンガの加工

土工〜加工〜窯焼き⇒製品レンガ

八、木材の加工

九、工場、ボイラーの整備、補修。

十、建築、大小多数。

すべてレンガ建で、壁、仕切り用は割り板を使用。

二年がかりで超大型建物を完成させてから、帰国命令を出す。

計画一方向部隊に与える労働を完成させてから帰国させる、一度には帰さない。帰国は病人怪我人を優先して帰す。在ソ中に共産主義教育をし、指導者を日本に送り帰すこと。

ソ連側にも労働大隊がある。ソ連の兵役は入隊してから二年間、この労働大隊へ付属し各種労働をしながら、職を身につけさせるとのこと。この間国の復興に従事させ、三年目に各科に分かれて本格的に軍の教育を受けるとのことであった。

先の建築工事現場に戻るが、ここではソ側の労働大隊の兵も一緒に作業をすることになる。合同作業であっても、日本人はよく働くが、ソ連の

兵隊はさっぱり働かない。兵隊は監督（工事の総監督）や将校がいるときは働くが、居なくなると動かなくなり殆どが、サボルのだ。共同作業なのでここでどうしても、トラブルばかり起きるのだ。

凍結もかなり深く、ツルハシで掘ることも難しく、地中に穴をあけダイナマイトを使用して爆破し掘り起こす。

土砂の運搬はトラックでソ連兵が運びだす。なにせ規模が大きいので、基礎の手堀も大変だ。地下一階、地上五階で長さ約百米の建物で傾斜地のため、三分の一からは地下なし。地下はボイラー室や倉庫があり、一階は食堂その他がある。二階以上はアパート、その他、部屋数も百以上に仕切られている、大きな建物だ。

基礎掘りが出来ると、大工が枠作りを決めて行なう。掘り上がると専門屋が揃っており、テユが大勢居るので仕事も早い。セメントの注入は日、ソ別々に行なわれ競争となる。技術ではソ側に負けられない。

総監督の下に二人の助監督がいて、各二、三人の職人がいる。それぞれ労働者の作業の指示に当たって居た。日本側の者は手まねながら指示の呑み込みも早く監督の受けもいい。どうしても兵隊とのトラブルが絶えず、政治局員のお出ましとなる。

政治局員の権力は相当なもので、将校でもかなわない。まして兵隊などは、鷹に狙われた蛙の様におとなしくなる。

基礎が出来上がると、今度は上部のすべてレンガ積みである。外壁が五十センチ、内壁が三十センチにレンガを積み込む。これが大変な数となる。そこで左官職の出番だが、とても人員が足りず、速成の指導養成で半人前ながら一本立ちとなってレンガ工として仕事をするようになる。川風の強い、凍れる日などセメントが凍るので湯を沸かして風除けの天幕を張りながらの仕事で苦勞する。

日本の大工は受けもよく各方面へ分散し小中の宿舎建築に携わる。この基礎も終る頃、仕上工の中から十名程が選ばれ、すぐ近くの空軍司令部の中にある地下ボイラー室へつれていかれる。ここでチームの分解、組み立て作業の指示を受ける。

凍れて割れたものをはずし、よいものと取り替え組み立てていくのだ。

破損したチームが山積みとなっている。地下室の仕事なので寒い風に当たるともなく、馴れた仕事で作業も進む。仕事の休み時間にアルミ板で煙草（マホルカ・紙で巻いて吸うもので煙草の莖を刻んだもの）を入れるケースを作っている処を監督が見に来て、

「お前何でも作れるのか」というので

「材料と道具があれば作れる」というとその時は

「そうか」

で終わった。

二、三日して職人が呼びに来て、別の場所へ連れていく。そこには亜鉛板が二枚用意してある。

「監督がお前にバケツを二個作ってくれと言っているので、今日から他の仕事はしなくても良いから、朝きたらここで作るように」とのことだ。

そこにはトタン板と鉄一丁だけで、ハンダもなければ何も無い。さて困ったぞ、水の漏れないようにするにはどうすれば良いか。

まずは図形を計算、新聞紙で型紙を作って型取りをする。すべて行き当りで適当な廃材を見付けて代用し、形に仕上げていく。

そこへ監督が仕事の合間にちよいちよい見に来るのだ。捕虜を一人で置く心配なのか、出来上がり具合を見に来るのか、来ては話し掛けたり煙草（巻きたばこの高級品）を出して奨めたり、火まで点けてくれる。

煙草を吸いながら仕事をしようとすると、仕事を止めて煙草を吸えというのだ。手まねで話をするうちに、なかなか話の分かる温厚な人という印象であった。

五十歳前後の人で以後、タワリツシ・セリゲン。タワリツシ・ムラカワと呼ぶようになる。人前ではカマンジエール（監督）と呼んだ。

バケツの底は油（生肉の油）を挟んでそれを焼き付かせる。（一番苦勞した処だ）何とか無事に完成し、引き渡す。

監督も殊更よつこんで、お札にパンや煙草を沢山もらう。以後、すっかり信頼関係が出来帰国まで、いろいろな面について世話になる。

スチームの組み立ても終る頃、監督の指示で、自分と他一名が明日から来る様にとのこと、他のものは別の現場に行く。

昨日まで兵隊の警備で送り迎えをされていたが、次の日から職人が宿舎まで迎えに来る。随分信頼されたものである。仕事に従事することは

国家に対する奉仕である。（共産国）仕事はすべてノルマで計算される。働く者すべてがこのノルマにより賃金が支払われる。この賃金も決して

多いものではなく、日常生活に支障のない程度のもので、食費がほとんどを占め、決して裕福な生活とは言えない。

また、ものを売る店はすべて国営で、贅沢な物は一切無く、日常必要なものだけで、それも不足がちで品切れの毎日だとのこと。煙草などは家庭で作り乾燥させ、自分で刻んで吸うのだという。

一般の労働者はみな黒パンが常食であるが、上級幹部になると、白パンでありその他副食についても、贅沢なものが多く、共産国の平等は一般人に対してだけの平等であつて、支配者層は格別の扱いがされている。

我々の生活は労働のノルマによつて食糧の支給がされるので厳しい。しかし労働大隊になつてからは、ノルマの%もよく生活も安定し、すべて生

活面においても違つてきた。（後述にする）

ソ連はロシア帝国を革命により、共産党の独裁政権としレーニン、スターリンと受け継がれてきたが、広大な土地を有し、何億の人の中の一部共産党員によつて支配し、またこの正共産党員になることは、なかなか出来なかつた様である。

党員の配下を各事業所、現場に配し党に対する批判に目を光らせていたようだ。我々がソ側の一般人と話をするうちに政治のことになるとかたくなに口を閉ざし、一人対一人になると愚痴が出るが、これは誰にも言つてくれるなど口止めされる。なぜかと聞くと、知れると俺は監獄に入れられるとのこと。

少しの政治批判も恐れられていた。生きて行くために、ただ言うことを聞いて働くだけだとのこと。病氣や怪我をしたときは国で見られるので、心配ないとのこと。

個人個人は人のいい労働者であり兵隊である。党員は別として。日本軍の中には女性といえは従軍看護婦だけで女性の兵隊はいなかつた。しかしソ連軍の中には女性の将校も兵隊もいる。銃を持つて立哨もする。

兵隊の中には読み書きの出来ない者もいて、数を数えられない兵隊もいた。小学生以下で数の×・÷計算など全く出来ない者もかなりいたようである。

収容所から毎日仕事に出る時、担当警戒兵の人員確認があるのだが、これに時間が掛かる。

少ない班は一列で、すぐ終り問題は無いが、多いところは四列従隊で出ようとすると、数えられず、一列か二列にして数えるが、これも間違つて数え直しが多い。百人〜二百人の多い時など、七、八分通り数え違つていてまた戻り、初めから数え直しでは時間が掛かりすぎて、全く

閉口する。

冬の寒い目これをやられるとたまらん。一時間くらい掛かる時もあった。全体ではないが、一部の、しかも兵に多い。多い時は将校か上級下士官が出るようになり、それで解決する。

街の中の仕事がほとんど警備兵も二、三人しか付かない。山にいた時は三〜五人に一人の割合だった。警備兵も初めは、素手の捕虜でも怖かったであろう。まして山の中だ。時々脅しのためか発砲もしたが、街の中ではそれも出来ない。

日本兵に馴れたのと、我々が仕事に自覚したこともある。それより彼等には、街の中を巡視しているゲッピョー（憲兵のような人）政治職員や将校以上の者が煙たい存在のようだった。

我々はもちろん与えられた作業周辺以外の通行は、単独では出来ないしかしソ側の誰かが一緒ならどこへでも行けた。

極東空軍司令部

朝七時職人が收容所へ迎えに来る。昨日の内に收容所所長のところへは連絡がついている。職人と兵隊（責任者の下士官）との話ですぐ決まり、職人に連れられて門を出る。三百米ほどの道だが、兵の監視より開放され晴れ晴れとなる。

厳しい司令部の門も簡単に通過できる。一夜でこんなに扱いが変わったのに驚く。どこからどのような指示でこれほど変わるものか。労働者としての扱いを受けうれしいが、反面その指示指導のあり方、陰の力が恐ろしく感ずる。

仕事はこの司令部建物の、地下から屋上まで各部屋を通っているス

チーム管のバルブ、ラジエーターのスチーム漏れ、修理点検員として働くことであった。初めは建物の中の様子や点検場所などの指導を受ける。建物も大きくコの字型で地下一階地上五階と屋上に多くの配管やバルブがある。

中央二階から上は将校宿舎（アパート）で右側は食堂、娯楽室、炊事、医務、倉庫、他すべて揃っている。独身将校の共同部屋もある。

左側は地下の機械室から事務室まですべて司令部だ。屋上には展望所があつて立哨されており、常に四方を巡哨し厳しく警戒されている。一人で上へ上がつても、決して怪しまれない。挨拶をして見回り仕事をする。建物の中はどこへ入つても良いと監督から指示されていた。しかし初めは不安であつたが、日が経つにしたがつて、少しずつ会話も覚え、仕事にも慣れ、司令部内の将校や、家族の人達も顔を知りようになり仕事も楽しくなる。

一週間程して仲間の一人は他の作業現場へ回され、以後は自分ひとりだけとなる。正面地下にボイラー室があり、ソ側のボイラーマンがいる。ここが修理工場であり休憩所でもある。

極東の一都市の重要拠点である。航空司令部の中の仕事に、捕虜の日本兵を使うとは、大胆というか、とても考えられないことで、同志として迎えられたことは、信頼があつてのことだろう。日本人として誇りに思う。

営門の通過も自由（日本式の敬礼をする司令部勤務の日本人）として面識も出来、信頼され安心して仕事も出来たし、春まで楽しい三か月の勤務であつた。

何百人もの司令部の中（家族や使用人を含む）に日本人は自分一人なので、珍しさも手伝つて、優しく扱ってくれた。

部屋に入り(留守のときは入らない)異常点検中、ある幹部がそばに来て、話を掛けてくる。初めは手まねが多かったが、少しずつ日常会話が出来るようになり、部屋に入ってから出るまで、会話の対応が大変であった。

将官以下は、部屋も共同が多く、尉官級になると一部屋に四、五組が入っている。部屋は広いが入り口は一つ、中の仕切りはカーテンが一枚だけで、それぞれベッドがあり、一つのベッドで若い二人(夫婦)が寝るのだ(一、五〜二坪位)ちようど、日本の病院のような生活だ。

たまに、二人仲良く寝ていることもある。昨夜主人が夜勤だったり、また主人が出勤したりしたのでろう。女性ばかりの部屋に入ると大変、共同でからかつて来るのだ。点検が終つて帰ろうとしても、入口に錠を掛けて出さない、こちらも若い相手が四、五人もいてはかなわない。

早口でしゃべり互いに笑っているが、こちらには何を言っているのか、さっぱり分からない。余りしつこくされると、「政治局員に言うぞ」というと開放してくれる。

彼女たちも、政治局員は相当怖い人らしい。

上階に行くにしたがつて、上級家族の部屋だ。司令部では中間職か、どこの職場でもこの中間職はうるさい存在だ。警戒心の強い将校や家族もいたが、ほとんどが技術労働者としての扱いを受けた。

大勢の中には駐日大使の武官として、朝鮮や樺太にいたという人もいて、片言ながら日本語を話す将校や家族もいた。

日本語の話せる人のいる所は懐かしく、仕事の合間にはよく遊びに行き、日本の話をしたりして、随分ご馳走にもなった。上階の司令官の部屋は広く、樺太の公使館には二、三年いたと言ふことで話も弾んだ。

自分は北海道出身だと言ふと、北海道の札幌へも行ったことがあると、懐かしがつていた。マダムも何年振りかの、日本語の会話が楽しいと喜ん

でくれた。六、七歳の男の子がいて、この子供に日本の字を教えて欲しいと言われ、随分部屋に通つて「いろは」を教えてやった。